

第 13 章 青年期Ⅱ：1953 年～1955 年前半（16～18 歳）

置き去りにした運転手に一泡吹かせる

6 時に再びトラックに乗って出発した。荷台の枠からはみ出た荷物にもたれてという点は同じだったが、後ろに乗ったのは私一人だけで、あとは運転手と助手、それにもう一人の乗客が運転席のキャビンにいるきりだった。運転手はかなりの大男で名をラルビ・ルマスクリ (Larbi Loumaskri) と言った。トラックはだいぶ長い距離を走り、時刻は正午になった。サンドイッチを食べるため休憩し、再び出発して、私が置き去りにされたのとほぼ同じ地点へ到達した。その時、進行方向のはるか彼方に砂埃が舞い上がっているのが見えた。こちらに向かって走って来る車があるらしい。私の乗ったトラックは速度を落として停車した。運転手が降りて来て荷台によじ登り、私に言った。

「どうだ、調子は？」

はあ、大丈夫です、と私は応えたが、初めて人から気にかけてもらって嬉しくなり、すぐに、ありがとう、と付け加えた。運転手は続けて言った。

「ほら、もうすぐ、君を置き去りにしたトラックが来るぞ。この袋と箱の間の隙間に隠れて、静かにしているんだ。俺が呼ぶまで出てくるんじゃないぞ、いいな？」

なんでこんなことを言うんだろう、と私は不思議に思った。一昨日の運転手は、もしかして悪いのは私だと思っていて、私の姿を見るなり怒鳴りつけてくるか、最悪の場合は殴りつけて来るかもしれないからか？半時間ほど後、二台のトラックは互いにすれ違うところまで来ると、速度を落とし、互いの運転席が向かい合わせになるように止まった。むこうのトラックの運転席の窓から煙草の煙と共にしわがれた声が響いた。確かに一昨日と同じ男だった。彼は、当地風の長い挨拶もそこそこに、今日の運転手に聞いた。

「二日前、この辺りで一人若造をとりこぼしたんだが、その後やつがどうなったか、何か知ってるか？」

「お前が、途中で置き去りにした子供の事か？」

「置き去りになんかしてない。やつがヘマをしたんだ。」

「ヘマだって？一体何時ごろその子供がいないのに気づいたんだ？」

「次の日の午後 5 時ごろになるまで、てんで気づかなかったよ。」

「で、なんで探しに戻らなかったんだ？責任感ってものがないのか？」

「きっと別のトラックに拾われると思ったんだ。」

「でも、反対方向に行くトラックとすれ違ったんでもなければ、分からないじゃないか？まあ、脇道のベニアバスからコロシ・ベシヤールへ行く車があったかもしれないが。どっちにしろ、確実じゃないだろ？」

「もういいって。そのガキのことで何か知ってるか聞いているんだ。」

「よくないさ。お前は乗客のリストを持ってたんだろ？出発前に点呼するのが、お前の仕事だ。」

「いいから、何か知ってるなら早く言えって！」

「その子は神の下に召されたよ。」

一昨日の運転手は一瞬絶句した後、うめくようにこう言った。

「アラーフ・アクバル…」（おお、神よ…）

一昨日の運転手は、言葉もなく運転席から降りてくると頭を抱えて地面にうずくまった。長いことそうしていたが、やがて途切れ途切れの音が聞こえて来た。

「神よ、俺はどうしたらいいですか？どうか俺の罪をおゆるし下さい…」

彼は顔を上げ、自分のトラックの荷台の乗客達に方へ向かって言った。

「俺はもうだめだ…。どうしたらいいんだ。もう運転なんて出来ない。手も足も無くしてしまったみたいに、まるで体に力が入らない…。」

今日のトラックの運転手は、同僚が十分後悔しているのを見て取ると言った。

「俺にはお前を罰する権利はない。ただ間違いに気づかせようとしただけだ。俺たちは仲間だからな。だが、悪い噂はあつと言う間に広がって、俺たち運転手みんなの評判を落とすことになる。SATT の運転手は客を路上に置き去りにするってな。どんな時でも責任は全うしなきゃならないんだ。」

そして、少し置いてから言った。

「元気を出せ。あの子供はちゃんと生きているよ。さあ謝るんだ。」

今日の運転手は、私に降りてくるように言った。一昨日の運転手の方は、涙で顔をくしゃくしゃにしていた。私が彼の前に行くと、彼は私の頭の頭をなで、そして謝った。私は視線を上げて、その男の長身で痩せた体を眺めた。唇が煙草の吸いすぎで真っ黒になっているのが印象的だった。この時私は疲れて頭がぼうっとしていたし、自分を死ぬかもしれない目に合わせたやつへの恨みも心の中に蘇って来て、胸がつかえてすぐには何も言えなかった。逡巡しているうちに今日の運転手が割って入った。

「じゃあ、また荷台に乗りなさい。出発するぞ。」

私は黙ったまま荷台によじ登って座った。私は、来し方の方を向いて座り、一昨日のトラックがいつまでも動かないでいるのを眺めていたが、その姿は大地の上で段々小さくなり、仕舞には全く見えなくなった。

私は頭の中で、一昨日からの一連の出来事を反芻した。これらは本当に起きたことだったのか。沙漠で置き去りにされた人間が、本当に生還できるものだろうか。もしかしたら私は既に死んでいて、魂だけが前世を懐かしんでもどって来たのじゃないか。そんなとりとめもない考えが次から次へと浮かんで来た。しかし、沙漠の悪路の振動が私を現実に戻した。「いや、僕は生きている！」私は自分に言い聞かせた。「これは神が課した試練だったのだ。僕はそれに合格したんだ。」神は時折人を試される。その人が、神の意を汲んで試練に耐えれば、神もその人を助けて下さるが、その逆だったら、自然の理（ことわり）の前にその人はあえなく命を落とすだろう。人生はコインの裏表だ。今日自分の身に起こったことは、明日には誰か別の人に降りかかる。今奢侈を欲しいままにしている、それに影が差す日は遠くない。反対に、不運に泣くことがあっても、神を信じ他人にも誠実に接していれば、そのうち運が向いて行く手を阻む霧もきっと晴れる。



イメージ画像：沙漠道路の途中で昼食の休憩（2002 年記者撮影）

ワジ（涸川）で道連れを拾う

トラックは走り続けた。私は右に左に揺すぶられながら、眠りと覚醒の間を行ったり来たりした。早く休憩にならないかとそればかりを思っていた。砂の上で手足を伸ばしたかった。トラックは乾いた涸川の上を渡った。コロン・ベシャルとアドラールの間点ケルザズはもうそこだ。私は安堵した。運転手はケルザズできっと休憩をとるはずだ。ケルザズに着くと、そこには一台のトラックがエンジンの故障のために立ち往生していた。その車の乗客は子供二人、女性二人、男性五人の計九人で、一つの家族のようだった。彼らはカフェの前で横になって休んでいた。故障したトラックの運転手が私のトラックの運転手の方へ近づいてきて言った。

「自分たちは昨日からここに足止めをくってるんだが、こっちの乗客をそっちの車でアドラールまで連れて行ってくれないか？エンジンの修理部品が来るのを待ってるんだが、明日か明後日になりそうなんだよ。」

私の方の運転手は即座に言った。

「いいとも。そっちの客達に、こっちに荷物を積み替えるよう言ってくれ。」

五人いた男のうち二人が荷台に登り、あとの者が下に残って、積み下ろし作業に取り掛かった。

積み下ろしは瞬間間に完了した。新しい乗客達の一人が、私たちの運転手のところに来て礼を述べ、よろしく頼むと言った。

「いやいや大したことはない。自分だって何時同じ目にあうか分からないさ。」と快活に応えたが、こう念を押すことも忘れなかった。

「ただ、予め断っておくが、この後休みなしで突っ走るのは無理だから承知しておいてく

れ。俺たちは朝から休みなしで走って来たんで、今日の夜はどこかで眠らなきゃならない。」新しい乗客たちは、先を急いでいたので、運転手の言葉に渋い顔をしたが、他にどうしようもないので黙って聞いていた。出発前に私たちは紅茶を沸かすなどして休憩した。疲れ切っていた私には、一杯の紅茶がことの他ありがたく感じられた。1 時間ほど休んだ後、運転手は「さあ出発するぞ」と私たちを促したが、自分の助手とキャビンに席を占めていた客に向かって、こうも言った。

「ここから先キャビンには女子供を乗せるから、男はみな荷台に乗ってくれ。」

トラックは出発し 10 キロほど走った後、とある丘を降り切ったところで停車した。そこは砂地だがきれいな場所だった。運転手は言った。

「ここで今夜は野宿するから、もし毛布や食べるものを持っているなら降ろしなさい。お祈りをしたり、夕飯やお茶を用意するなり、何でもいいようにするといい。明日の朝は夜明けに出発するぞ。」

何人かは用を足すために遠くに散って行った。道連れになった家族の一人が言った。

「我々はそう人数がいる訳じゃないから、別々に食べることもないでしょう。お礼の印に、私たちが持っているものをお分けしましょう。」

女性と子供たちが一塊になって座り、男たちは男たちで集まった。和やかな雰囲気の中で食事が進み、食後は紅茶を囲んでの四方山話となった。暖かい連帯感の中、私は旅の疲れを忘れる思いだった。皆でお互いの身の上を語り合ったが、私も数日前に自分の身に降りかかった災難を語った。彼らは皆私に同情してくれ、中の一人は、役所に訴えるべきだとも言ってくれた。私は、胸にわだかまっていたしこりが溶けていくのを感じた。その時運転手が言った。

「こうして語り明かしてきたいところが、明日は早くに出発しなけりゃならない。もう寝よう。」

私は数日来の疲れが溜まっていたので、すぐに心地良い眠りに落ちて行った。翌朝は、運転手のだみ声で目が覚めた。

「起きろ、起きろ！寝過ぎしたぞ！」と彼は私たちをせかした。

「はやくお祈りを済ますんだ。すぐ出発するぞ。お茶を飲んでる暇はないからな。」

皆が大慌てで、毛布やその他のものをかき集め、お祈りをし、トラックの荷台になんとか飛び乗った。残りの道のりは 300 キロ以上もあったので、途中何回かエンジンを冷やすために停車した。その度ごとに、乗客たちは遠くへ散らばって用を足したり、しびれた足を延ばすため少し歩き回ったりした。

トランクを盗まれる

トラックは午後 2 時ごろアドラールに着き、SAAT（「アフリカ熱帯地域運輸会社」の略称）の大きな発着場に入った。私はすぐに事務所へ行き、カバンを返してくれと頼んだ。係員が荷物置き場の至る所を探したが、私のトランクを見つけることは出来なかった。

「君のカバンはないよ。あるのは小包だけだ。」と係の男は私に言った。

私は自分の身に起こったことを説明したが、彼は聞く耳をもたないという風だった。私はむきになって、先に着いているはずだからあるはずだと強い調子で言い募った。

「じゃあ、荷物を預けた時の半券を持っているか？」と別の一人が、私より更に強い調子で言った。

手荷物だったんだから、ある訳がない、と私は言った。

「じゃあだめだ。調べようがないじゃないか。私たちも暇じゃないんだよ。」

私のカバンはどうやら盗まれてしまったらしい。この事実の前に私は愕然としたが、他にどうしようもなかった。事務所を出る前に、アウレフに行く便はあるかと訊いたところ、明後日の朝に一番あるとのことだった。

私は足取りも重く事務所を出た。これからどうしたらいいか、誰に助けを求めたらいいか皆目分からなかったからだ。それから少しの間、私はアドラールの街の中を当てもなく歩いた。一軒の家の前を通りかかった時、何故だか本能的にその家に住んでいるのは情け深い人のような気がして、私はその家の塀の下の日蔭で横になることにした。とても疲れていたもので眠ろうとしたが、カバンのことが気になってだめだった。私は着替えを持っていなかったもので、今着ているものはもう埃まみれ汗まみれだった。このまま家へ帰ったら、母たちは卒倒してしまうかもしれない。私は頭がくらくらしてきた。その時、一人の男の人がその家から出て来て、私に、どうしたのかと声をかけて来た。私は一部始終を語った。

「アウレフの子なんだね。どこの家だい？」と小父さんが聞くので、モハメッド・ハマジの息子だと答えた。

「なんとまあ。君のお父さんなら、よく知っているよ。確か伯母さんのアイーシャとゾーラは二人ともフランス人と結婚した、そうだろ？みんな親切な人たちだ。君たちの住いはガスベ・マイハフ（Gasbet Maikhaf）地区だったね。」

私の家族を知っているなんてと、私は、この偶然に私は感謝した。

「さあ、そんなとこに居ないで、うちへ来なさい。歓迎するよ。」

家へ入りながら小父さんは言った。

「アウレフのアーメッド・オウユーセフは知っているかい？」

私が、知っている、確かタカラフ地区に住んでいる家族だったと思うと答えると、小父さんは、自分はそのアーメッド・オウユーセフの息子のエル・ハッジだと言った。そして、明後日アウレフに行くトラックに乗るまで自分の家にいなさいとも言ってくれた。

翌朝、小父さんは、トラック会社の事務所にも一緒に行ってくれた。彼は事務所に入るなりきつい調子で、会社の責任を糾弾した。

その調子に圧されて事務員もこう言った。

「その子には気の毒だと思うけれど、カバンはきっと盗まれたのですよ。一緒に乗っていた誰かが、トラックが着いた時その子がいなくて気づいて、手荷物は登録されていないから、ここぞとばかりに盗って行ったんでしょう。我々で被害届を出しますよ。会社でもこの件を検討して、後から弁償するようにしましょう。」

「そんなことをしていた何週間かかるか分からない。この子は、いつまでもアドラールに

留まる訳に行かないんだ。私の名前を登録しておいてくれ。法的な手続きになったら、私が彼の代理人をするから。」

ようやくアウレフの我が家へ

その翌朝、予定通り私はアウレフ行の郵便トラックで出発した。今度は 180 キロ足らずの旅だ。幸か不幸か、否応なしにトラックの旅には慣れたし、もうすぐ母や伯母、姉妹に会えると思うと、もはや苦痛は感じなかった。6 時間足らず後には、私は既に家族の中にいた。家では女たちの悲鳴と涙で迎えられたが、皆私の無事の帰還に嬉しそうだった。近所の人たちも押しかけて来て、職業訓練センターの様子や、もらった資格のこと、炭坑会社の仕事、等々、興味津々で色々と質問を浴びせかけて来た。しかし、ゾーラ伯母さんが、何か私の様子を変だと気付いた。

「家へ帰って来たというのに、どうしてそんなに悲しそうなの？何かあったの？」

そこで私は再び私の災難を語った。

「そう。それでカバンも何も持たずに手ぶらで戻って来たのね？」

しかし、そこで母が言った。

「お前が私たちの宝よ。生きて私たちの所に戻ってきてくれた。それで十分よ。物はまた後でいくらでも買えるけど、命はそうはいかないのだから。」

母のこの言葉に、私は心底慰められた。昔私が、学業成就の祝典のことで思い悩んでいた時も、母は、こんな風に私を慰め啓発してくれたなど、懐かしく思い出した。何週間か後、アドラールへ行く人があったので、私は私のカバンのその後を聞いてくれるよう頼んだが、相変わらず何の進展もないようだった。